

佐々木衛・方鎮珠編

# 中国朝鮮族の 移住・家族・エスニシティ

東方書店／2001年1月／314頁／5400円



## 高 明潔

### 一 中国朝鮮族およびその研究

#### (一) 中国朝鮮族について

中国の東北三省、つまり黒龍江省、吉林省、遼寧省には約二百万人（二〇〇〇年に行なわれた国勢調査の統計による）の朝鮮族が居住している。そのうち約半分近くは吉林省東北に位置し、中国、ロシア、北朝鮮の三か国が国境を接する地である「延辺朝鮮族自治州」に集中している。延辺朝鮮族自治州には「延吉市」「図門市」「龍井市」「敦化市」の他に、「和龍県」「安図県」などの行政区画がある。

また、吉林省南部の「長白朝鮮族自治州」は、一九五八年九月一五日に設けられたもう一つ朝鮮族の集中居住地であり、自治県には東北随一の高峰である長白山（別名白頭山、海拔は約二七〇〇メートル）があり、朝鮮族のもっとも古い定着の地とされている。それ以外に、他の地域で異なる民族と一緒に混じって住む朝鮮族のところにも四二の民族郷をそれぞれ設けている。

朝鮮族の起源については、中央アジア

のアルタイ山脈地方に住むアルタイ系の住民が東へ移動して中国東北地域に留まり、古代中国では「東夷」の名で知られるようになって、さらにその一部が東進して朝鮮半島に入り古代朝鮮族を形成したと推定される。中国東北地域と朝鮮半島は陸続きであるので、古代から朝鮮族が東北地域でさまざまな機会に活動していたというのも事実である。

中国領内に定着している朝鮮族の由来を大別すると、三つのケースに分けられる。①明末清初期の一七世紀頃、半島北部からやってきた少数の移民、②一九世紀半ばから二〇世紀初期までに移住してきた移民、③一九三〇年代初期から四〇年代半ばまでの移民。このようなルートによって東北地域に移住してきた朝鮮人移民は、朝鮮半島と中国を結びつける存在であって、現在中国東北の朝鮮族社会を形成したのである。

一九四九年中華人民共和国の設立後、一九五二年九月三日に「延辺朝鮮族自治区」がスタートし、後に五五年「自治州」に改められ、現在まで至っている。中国

政府は一九五三年から領内に住む少数民族集団に対して「言語、経済、文化、心理素質による民族帰属の弁明」という民族識別の作業を行なったが、東北地域に住む朝鮮族に対しては大規模な識別の作業を行わずに、「朝鮮族」のまま中国の構成員として中華人民共和国の枠組みに組み込んだ。それ以来、中国東北地域に位置する朝鮮族社会は、東北地域で一九四七年末より行なわれた土地改革、一九五六年からの人民公社化運動、一九六六年からの文化大革命、一九八〇年代の生産請負、一九九〇年から始まった市場改革など、現代中国社会が経験する道を歩んできている。

## (二) 日本における

### 中国朝鮮族研究について

日本における朝鮮半島の歴史的・形態的理解をめぐる諸問題への研究については、この小稿で論じる余裕はない。一九四〇年代半ばまで、中国東北地域に住む朝鮮族に関する記録のほとんどは、当時の満州調査の一部としてなされ、しかも系統的な調査としては行なわれなかった

と言えよう。

一九五〇年代から一九八〇年代まで、中国朝鮮族に関する研究、特に社会学的なアンケート調査、および社会人類学的な綿密な参与調査は、中国が外国人研究者の調査を厳しく制限していたこともあり、皆無に近かった。一九八〇年代に入ってから、中国華南や西南地域における少数民族社会・文化に関する研究調査が盛んに行なわれたのに対し、北方や東北地域における少数民族に対するファースト・ハンドな研究は未開発、あるいは開発途中の状態にあつたと言えよう。

こうした未開発や開発途中の状態が改善されつつある兆徴は、一九九〇年代に入ってから明らかになった。本書にも取り上げられたり、引用されたりしているように、例えば、高崎宗司の『中国朝鮮族——歴史・生活・文化・民族教育』（明石書店、一九九六年）、中国東北部朝鮮民族民俗文化調査団（代表 竹田且）編『中国東北部朝鮮族の民俗文化』（第一書房、一九九九年）、および在日中国朝鮮族青年会による研究や中国朝鮮族出身の研究者

である韓景旭氏の一連の研究等々（紙面の制限で、その他の成果は一々あげない）のほとんどは、一九九〇年代以後の研究業績であつて、しかも高く評価できるような成果である。

本書に取り上げている研究蓄積以外に、次の研究も重要である。例えば、鄭雅英氏の「民族教育にみる中国朝鮮族——揺れ動くアイデンティティの記録」（『アジア・アフリカ研究』一九九八年第三八巻第一号〔通巻三四七号〕、アジア・アフリカ研究所）、および同氏の『中国朝鮮族の民族関係』（アジア政経学会、二〇〇〇年）も優れた研究と評価されている。また、権哲男氏による図門江地域開発に関する一連の研究、例えば、『図門江地域開発の現状と問題点』（『現代中国』第七四号、日本現代中国学会、二〇〇〇年）なども注目されている。

朝鮮戦争勃発五十周年の二〇〇〇年に、南北朝鮮首脳会談が開かれた。朝鮮民族全体が、今後、どのような動きで、どのような方向に向かつて行くのが、課題となつている。一九九二年中韓の国交樹

立以前、すなわち、一九八〇年代半ばから東北の朝鮮族の積極的な呼応により、韓国企業の中国進出はすでに盛んに行なわれていた。さらに、かつて中国の改革に否定的な態度を持っていた金正日北朝鮮総書記も中国訪問の結果、中国の改革の評価を改めることになった。こうして、南北両朝鮮とも国交を持つ中国、それに朝鮮半島と陸で接する中国国内に抱えている独自の朝鮮族社会では、どのような社会構造のもとに朝鮮民族としてのアイデンティティを顕著にしているのか、どのように朝鮮半島情勢の変容を受け止めているのか、意味深い課題となつている。『中国朝鮮族の移住・家族・エスニシティ』は、まさにこのようなタイミングに合わせて、読者の前に提示された。

## 二 本書の構成

編者佐々木衛氏は、本研究について「中国朝鮮族、北朝鮮、韓国の三者関係を、お互いに双方向的に向かうベクトルで理解するようになつていのではないだろうか」と推測する。このようなアイデンティ

ティが見られる中で、中国朝鮮族が韓国、北朝鮮と朝鮮族という同じ起点を共有しながらも、中国朝鮮族としての自律性をどのように形成しているのかという問題が、大きな関心を持って問われるであろう。我々の研究も、ここから出発している」と序文で述べている。これに基づいて出来上がった成果は、以下の目次に表れるものである。

序文——中国朝鮮族研究の課題と

本研究の概要

I 延辺朝鮮族の社会的性格

II 本調査研究の関心と調査概要

III 本書の構成と謝辞

第一部 現代中国朝鮮族の移住とエスニ

シティ

一 延辺朝鮮族における周縁性とエスニ

シティ

I はじめに

II 歴史的経緯

III 周縁性

IV 調査村落での知見

V 延辺朝鮮族におけるエスニシティ

二 現代中国の社会発展の中の中国朝鮮族

- I 「延辺隊」勝ちの意味
- II 朝鮮族の知識人が語った中国朝鮮族
- III 激動した中国近代史を背景に
- IV 朝鮮族と漢族の間
- V むすび

三 移動社会としての太陽鎮

- I — 一〇〇戸調査の分析結果から
- II はじめに
- III 地域移動から見た太陽鎮
- IV 社会的再生産のパターンから見た太陽鎮
- V 要約と議論

四 延辺朝鮮族の移住と家族ネットワーク

- I はじめに
- II 太陽鎮とL村の社会概況
- III L村における朝鮮族家族の移住と定着
- IV 朝鮮族家族の親族ネットワークの広がり形態
- V 家族・親族のつき合い
- VI まとめ

五 中国における朝鮮族の文化と教育の発展概況

- I 解放以前
- II 日本の敗戦から中国の建国まで
- III 建国から文革が始まるまで
- IV 「文化大革命」の期間
- V 改革開放の時代

第二部 朝鮮族家族の生活とネットワーク

- 一 吉林省延辺朝鮮族自治州の社会概況
- II 歴史と地勢の概況
- III 民族の移動と人口の構成
- IV 現在の流動人口
- V 文化・教育

二 龍井市太陽鎮とL村の社会概況

- I 太陽鎮の社会概況
- II L村の社会概況
- III 共同調査龍井市L村の生活と家族ネットワーク
- IV 【共同調査】延吉市民の家族と生活
- 五 【共同調査】北京の朝鮮族市民

四 【共同調査】延吉市民の家族と生活

- 資料3
- II 都市に住む朝鮮族

III 中国朝鮮族のエスニシティ

目次に表われているように、第一部「現代中国朝鮮族の移住とエスニシティ」は、各章の執筆者が各自の分野と視点に基づき、本研究から得られた知見と資料を分析する作業のもとに、中国朝鮮族の社会的性格、アイデンティティの構成、文化的自律性と変容、移住と親族ネットワークを考察したものである。また、中国朝鮮族の文化教育状況に関する基礎資料も第一部には収録されている。

第二部の「朝鮮族家族の生活とネットワーク」は、本調査の資料編であるが、読者が広く利用できるような形態で整理がなされている。L村、延吉市、北京市での訪問による聞き取り調査から、家族の生活史、親族のネットワーク、家族の行事をはじめとする朝鮮族の生活の具体的な事実の記録がある。それで、調査記録の内容をできるだけ損なわないような形式で整理されている。この小文では、紙数の制限によって、主に第一部について管見を述べておきたい。

### 三 第一部構成内容の所見

#### (一) 第一章「延辺朝鮮族における周縁性とエスニシティ」について

執筆者伊藤亜人氏が、まず、中国朝鮮族は中国のその他の少数民族と違って、「一貫して自民族王朝国家を維持してきた点で特異な存在である。また、明清以後の今日にいたるまで、域外からの移住によって新たな少数民族として地位を獲得してきた点でも朝鮮族が特異である」と中国朝鮮族の特異性を強調している。

氏は第二節「歴史的経緯」において、朝鮮族の移住の歴史を、一七世紀の清一朝鮮関係からはじめ、一九世紀以降・日清戦争と大韓帝国の独立後・第二次大戦終戦後まで、という流れに沿って、朝鮮族の東北地域移住、開拓の歴史的背景や経緯などを概観的に紹介した。

第三節「周縁性」では、氏は歴史的・地理的な側面から延辺地区の周縁的な性格を取り上げた。氏が、清国が朝鮮半島からの移民に対して打ち出した政策からはじめ、その政策の変化によって起った

清国と朝鮮側との国境問題、当時のロシア側の関与、その後の日本による韓国支配に伴う韓国人保護の名目のもとでの間島（延辺地域）を韓国領土と見なした支配、という歴史時代の流れを通して、氏が延辺の地がもつ「東北アジアの王朝や国家の周縁部に位置してきた」という歴史的な性格を論じた。

そして、延辺地域が持つ「周縁性」の地理的な性格については、氏が「この地方は地理的に見ても国家・王朝の周縁部に位置している。住民の多くは、空白地帯へ移住し開墾の担い手となった人々であり、また清朝の軍兵に編入されたり、後は抗日ゲリラやいわゆる匪賊に合流する者などもあって、その周縁の状況は明らかである。朝鮮から南部沿海州方面への移住者は、農業ばかりでなくロシアの港湾を介した商業活動にも携わっていた。清国、ロシア、日本の三つの勢力の間の緩衝地帯における朝鮮人のこうした周縁的な性格は、朝鮮王朝および日本統治体制からの離脱と流出に起因するその流動性に注目すると一層明らかとなる」と指摘

した。

第四節「調査村落での知見」は、氏による延辺朝鮮族の「流動的」性格に関する考察である。氏が、半島部における朝鮮社会の流動性の高さを指摘しながら、それと比べる方法で、延辺朝鮮族社会の流動性の性格が時代変遷によって異なることをはつきりと示した。評者の理解としては、その流動性の性格は次のようなものである。

かつて流民として移動してきた朝鮮人は、山地が多くて農地に恵まれなかった朝鮮北部と比べれば、延辺地区は平野に恵まれ農業に適すること、また社会主義体制のもとでは農民の集団化による生産手段としての土地利用が保障されたことにより、定着化を高めてきたのである。しかし、改革開放の体制のもとで、延辺朝鮮族、特に女性による買出しが盛んに行なわれているのは他民族にはあまり例がなく、さらに中国と韓国との国交正常化以後における韓国系企業の中国進出に伴い、延辺朝鮮族の流動性は全国的にみても、また、どの民族と比べてみ

ても目を見張るものがあるのは特殊なケースである。

第五節「延辺朝鮮族におけるエスニシティ」においても、氏は、歴史時代の変遷によって、延辺朝鮮族の民族的アイデンティティに対する考察を行なった。一九世紀後半から二世紀半ばまでの朝鮮族のアイデンティティそのものについて、氏は、「現地での中国系住民との関係によって顕在化したというよりも、半島における日本支配下によって顕在化したものであったが、一方では、延辺における朝鮮人の政治的・経済的地位は日本の勢力を抛り所としていたという点で、両義的なものであったといえよう」と指摘している。

その後の延辺朝鮮族は「移民社会であるにもかかわらず、故郷や母国との関係を避けたまま、どこまでも中国内部での少数民族としての『朝鮮族』のアイデンティティを優先してきたといえる」とした。しかし、中韓国交が開けてからは、延辺朝鮮族が韓国側より世界範囲の朝鮮族社会に対して行なっている汎民族主義

的な動きの影響を受けることもあれば、一方、韓国人企業家や商人たちから差別や詐欺などの被害を受けることもある。こうして、氏は、「延辺朝鮮族が『在日』の場合と同様に『中国朝鮮族』というアイデンティティがこれまでとは異なる新たな現実味を帯びるようになってきているようだ。その結果、一方では歴史的な概念である民族意識が高揚して、中国における公式の社会地位や威信から離脱する動きが見られるが、他方では、地域の朝鮮社会から離脱して中国語の学校での教育を通して、従来の中華人民共和国における成功と評価をめざす人々もおり、両者の間に乖離が見られるようだ」と指摘するのである。

最後に、氏は、延辺朝鮮族社会の研究について、踏まえるべき背景と考察すべき課題そして今後の展望、例えば、各地韓国人・朝鮮人同士を比較する研究の必要性、人類学における移民研究(migration studies)やエスニシティ研究が参考になること、冷戦中の国際的状況が延辺地区に及ぼした影響、国交に伴う半島との関

係などを取り上げた。

以上のような構成を通して、伊藤亜人氏は、延辺朝鮮族社会を時代の背景に置き、時代背景を柱として立てて、それをめぐって延辺朝鮮族社会の「周縁性」と「移動性」を同時的、動態的に考察にしたのではないかと思う。延辺朝鮮族の民族的アイデンティティの形成、時代に伴うアイデンティティの変容そのものは、あくまでも時代の変容というマクロ的な背景と緊密に関わっているという印象を評者は深く受けた。

## (二) 第二章「現代中国の社会発展の中の中国朝鮮族」について

第一節「延辺隊勝ちの意味」では、執筆者聶莉莉氏は、まず調査時点の一九九九年に開催されていた中国プロサッカー全国一部リーグ戦で、延辺朝鮮族自治州のチーム「延辺隊」と中国最強のチームである「大連隊」との試合が引き分けて終わった結果をもとに、「延辺隊」勝ちの意味を考えることから、サッカーと延辺朝鮮族の民族意識の関連、および延辺朝鮮族の民族意識に占める韓国の位置につ

いて述べている。

サッカーと延辺朝鮮族の民族意識の関連について、氏は、第一に、「延辺朝鮮族の話を借りて言えば、サッカーによって延辺の名、朝鮮族の力が国中に知られた。現在、サッカーは延辺朝鮮族のシンボルと求心力の一つとなった」という。第二に、「自治州政府がサッカーが社会生活において重要な役割を果たしているのに気づき、サッカーを民族の向上心や地域の連帯感を育成する手段として利用することになった」。第三に、「延辺でのサッカーはスポーツの領域にとどまらないで、民族意識の高揚、地域の振興、経済の活性化などとも深く関わっているのである」とまとめている。

氏は、「延辺隊」（あるいは延辺自治州）が韓国より監督を招いたことに関連して、延辺朝鮮族の民族意識における韓国の位置について関心を払っている。氏によると、「延辺隊」が韓国の監督を招聘したことは、一種の「援用的」関係があると思われる。つまり、「延辺が韓国から投資や寄付、援助などを受けているという経済

的な意味もあるが、祖先との系譜の繋がりがあり、民族文化の発祥地からさまざまな文化的要素を導入するという文化的な意味も含まれている」。氏は、また「ただし、中国朝鮮族にとって韓国が『援用的』であるというのは、韓国文化の影響がただ一方的に伝わってくるのではなく、『為我所用』、すなわち『われ』という中国朝鮮族の主体があり、『われ』を補強し役立てるという目的で、『われ』がその影響を受け入れたり拒否したりして、韓国文化を取捨選択しているという自覚をも表している」。

「延辺朝鮮族は、朝鮮族という共同体の中の韓国人・北朝鮮人と連帯を有しながら、なおかつそれぞれ独自性を持つ集団であり、中国という多民族国家の中の朝鮮族であるという自己認識を強調しているのである」と、延辺朝鮮族と韓国との関係について議論している。

氏は、政府から許可された出版物や中国朝鮮族の知識人との個人的な意見交換、および中国朝鮮族が独自に編集した『朝鮮語辞典』や『朝鮮語事業委員会』の活動などの考察を通した上で、「中国朝鮮族

は二重性を持つ。つまり、一方では、朝鮮半島の朝鮮民族と共同性があり、共に朝鮮民族共同体に属し、中国朝鮮族はその中の一「分支」（部分）である。また、一方では、中国朝鮮族、朝鮮民族共同体の中における中国的な特色をもつきわめて特殊な部分である」という朝鮮族出身の研究者の話を引用して、中国朝鮮族が「二重性」を持つと示している。

第三節「激動した中国近代史を背景に」は、中国朝鮮族の「二重性」が形成させた社会的背景に関する考察である。氏が、民族的アイデンティティの自覚について、「中国朝鮮族の場合、民族の悠遠的な歴史より、むしろ近代史、特に中国に移住してきた近い先祖、または自分たちが自ら過ごした生活史そのものが重視され、人々によって語られる対象となっていることである」と主張している。氏は、下記のような三つの理由を取り上げて、その主張を展開している。

まず第一に、「朝鮮から移民のほとんどは、元来貧しい農民だったので、歴史への関心や教養をそれほど持っていないなかっ

たことがあげられよう。……多くの人が流民的な性格、つまり移住先をたびたび変えているので、族譜を持つ余裕がなかったり、先祖の来歴や国に登場する先祖の事績をとおして朝鮮王朝の歴史を知ることがかりを失ったり、朝鮮半島に在住する一族との血統と系譜を確認することもまったく不可能となった」と指摘している。第二には「革命以後、中国政府の国民国家統合の理念や民族政策の影響、階級闘争理論などの国家的イデオロギーの支配、および文学・芸術・史学などへの政治の浸透が強かったことがあげられる」。第三には「民族史を語る際に、民族文化の側面より、むしろ政治的側面が強調される傾向があげられよう」。

第四節「朝鮮族と漢族の間」では、中国の朝鮮族は、漢族との歴史体験を持ちながら、しかし、他方では「朝鮮族」という民族的アイデンティティも強固に持っていること、および、中国朝鮮族が「中国で生活してきた結果、彼らは社会主義中国の持つ文化的要素を内面化したのである」と指摘されている。

中国朝鮮族アイデンティティは、民族の出自や神話、伝説などより継続的に受け継いだものだけではなく、歴史の流れにおいて自らの社会生活の実践から絶えず間なく創り出されたものでもある。また、朝鮮族は、時代・国家の政治制度に編成されながらも、自らのアイデンティティを自覚し、比較的強く表現している。さらに、北朝鮮にも韓国にも無条件に帰しようとはしなかった。朝鮮半島の同一民族の同胞に連帯感・親近感を持ちながら、あくまでも中国朝鮮族としての存在を主張しようとする。また、朝鮮族の韓国人への失望感・反感は、彼らに「中国が祖国だ」ということをさらに意識させ、「中国朝鮮族」というアイデンティティにますます固執させたのではないだろうか。以上が本章のむすびとして示されている。

本章のポイントは、中国朝鮮族の民族意識の「二重性」およびその形成を、現代中国全体の発展の中に置くとどこにあるのではないかと評者は考えている。このような視点は評者に大きな啓示を与え

てくれた。ただし、本章における部分内容については、評者の限られた視点からは、いくつかの異論がある。

まず、全体構成について。もし、延辺朝鮮族自治州のような少数民族地域社会の発展・変容を、現代中国全体の発展・変容というマクロ的な枠組に入れ込んで、より実証的な考察を行なうとすれば、例えば、文化大革命中につつた「朝鮮スパイ」の事件、すなわち「スパイ」とされても、中国という「祖国」を裏切らないケースが存在したことなどを、中国朝鮮族の民族意識の「二重性」ともつと関連付けて考察すれば、より客観的な議論をあげられたのではないかと。

氏は、「援用的」や「為我所用」という用語を用いて、延辺朝鮮族社会と韓国・北朝鮮との関係について議論したが、もし、事例に基づき、あるいは地元朝鮮族の用語を引用し、つまり、四八頁で朝鮮族の知識人の話を引用しているように、朝鮮族自らの言葉で朝鮮族社会と韓国両者の「援用的」や「為我所用」という関係を示すことができれば、読者により感



性的な認識を与えたであろう。

また、第二節「朝鮮族の知識人が語った中国朝鮮族」では、「かつて延辺自治州政府は韓国と北朝鮮から共同で『朝鮮語辞典』を編集して、用語を統一するよう」という提案を拒否した。そして、中国朝鮮族が独自に編集した『朝鮮語辞典』や『朝鮮語』という雑誌を出版している」と指摘し、さらに「中国朝鮮族は中国語を参考にして編集した朝鮮語辞典を自言語の正統とし、その存在の独自性を押し通そうとしている。これを見ると、南・北朝鮮に対抗する意識は、トラブルといった消極的なたちで現れているだけではなく、朝鮮民族という民族共同体の中に無条件に同化することを拒否し、個性的な存在を保持することに積極的に行動している」と見られる」と結論づけている。

評者が知り得ている範囲で言うると、一九九〇年代半ばまでの韓国の朝鮮文字は、大量の漢字を交えて使っていたことと、中国朝鮮族が用いる朝鮮文字は注釈や固有名詞以外に、基本的に漢字を使わないという事実がある。民族文字の使用、お

よび使用の形そのものには、かなり複雑な様相が組み込まれている、と考えている。つまり、延辺自治州が『朝鮮語辞典』の編集活動によって、半島に対抗するだけではなく、漢文化を主体とする中国という枠組の中で独自の存在をも表したがつているのではないかと考える。民族文字・言語と抽象化された民族意識という定義の関連は、かなりの複雑・多様な要因を呈しているため、これも評者自身の研究課題の一つである。

また、前述の「激動した中国近代史を背景に」の節で、民族的アイデンティティの自覚について、氏が取り上げた三つの理由の第一番目は、読者に教養をもつ人こそかえって自分史、系譜に基づき、自家族史、自民族を関連付けるのではないかという印象を与える。これについて、評者は、半島朝鮮のような高層的・王朝的正統朝鮮文化に対して、延辺朝鮮族社会がもつ文化そのものは、むしろ平民的・非正統的性格を示していると考えられる。しかも、社会人類学の視点からみても、平民層文化こそ、その民族の伝統を強く維

持し、変化し難い存在ではないだろうか。国家・民族の王朝による正統的な記憶との平民的・非正統レベルにおける記憶との関連は、歴史観や民族観と関わる意味深い問題であると思うが、紙面の制限で、ここでは問題点の指摘に止める。

### (三) 第三章「移動社会としての太陽鎮

——一〇〇戸調査の分析結果から」

執筆者園田茂人氏による社会学的な分析作業である。執筆者はまず、延辺朝鮮族自治州が持っている、朝鮮族が集中しているという少数民族の地としての「顔」、歴史的な紛争地としての「顔」、対外開放の地としての「顔」、という「三つの顔」と主張し、さらに、本章で調査対象とした「太陽鎮」も特にこうした「三つの顔」を持つ地であると説明している。

園田氏は大量の調査データを統計化する作業を通して、「地域移動から見た太陽鎮」と「社会的再生産のパターンから見た太陽鎮」という二つの側面に基づき、三つの顔を持っている「太陽鎮」に住む朝鮮族の移動、および社会的再生産の性格を考察していった。

「地域移動から見た太陽鎮」では、太陽鎮の朝鮮族における半島の出自・越境時期・最初の居住地・定着時期・両親の兄弟の居住地に関して、歴史的な様相を資料的に詳細に明らかにした。一方、それと対比的に「社会的再生産のパターンから見た太陽鎮」では、配偶者選択の方法・妻の出身地・職業の世代間移動・子どもの居住地など再生産の様相を客観的に分析している。

最後に、園田氏は「要約と議論」の形で二つの側面に対する分析作業を展開し、太陽鎮の持つ移動社会の性格、およびその性格が持つ特徴について、第一に、個人ベースでの地域的・社会的な移動が頻繁に行なわれている、第二に、みずからの民族のアイデンティティを強く意識しながらも、移動中でその要素をうまく現地状況に適應させている、また、朝鮮族のジェンダーが興味深い変容を見せている、と総括した。

#### (四) 第四章「延辺朝鮮族の移住と家族ネットワーク」について

この章は「中国の朝鮮族の家族形態を

韓国の家族と比較的に考察し、中国の朝鮮族としての文化の自律的変容を検討することを目的としている」と、執筆者の佐々木氏は明らかにしている。こうした主旨に基づき、氏は実証的な研究方法で、伊藤亜人氏をはじめとする、従来の半島朝鮮人家族の研究蓄積を踏まえた上で、中国朝鮮族における家族・親族の絆の形態を実態的に検証する作業を行なった。

検証作業に入る前、氏は、まず延辺朝鮮族における家族ネットワークを検討する際、次のような歴史的事実を考慮に入れる必要があると強調している。「まず第一は、中国の外に朝鮮族による国家が存続している事実。第二に、中国朝鮮族の移住・流動的性格である。第三に、中国の朝鮮族は、いうまでもなく少数民族としての社会的位置を免れない。中国の文化は多くの民族的文化の融合にその豊かさの根元を認めることができるが、少数民族と認知される民族は、朝鮮族もむろん漢民族からは周辺の存在と見なされていることも事実である」。

さらに、「これら三点はそれぞれ関連し

ながら、中国朝鮮族の文化の自律的展開の方向性を規定しているように思われる」と氏は述べた上、「本章では、朝鮮族としての自覚を高めている彼らが、家族・親族の絆をどのような形態で展開しているのか、まず実態的に把握することを目指したい。その上で、韓国で報告されているモノグラフとの構造的な検討をしてみよう。中国の朝鮮族という自律的な文化の成熟の可能性をこうした方面から理解することができるかもしれないと考えるからである」と本章の問題意識・考察の焦点を明らかにしている。

氏はまず「太陽鎮とL村の社会概況」から始め、次に「L村における朝鮮族家族の移住と定着」という背景を説明し、そして「朝鮮族家族の親族ネットワークの広がり」と形態」や「家族・親族の付き合い」という流れで実証作業を行なった。こうした作業を通して、まとめの部では、韓国のモノグラフと対比的に中国朝鮮族の移住と家族のネットワークを検証して行く。その結果を、評者より次のようにまとめている。

第一に、中国朝鮮族家族の多くは、一九三〇・四〇年代の朝鮮半島から生活の糧を求める流民度の移住を経験している。本村の場合も、村の最初に定住した祖先は、家族形態から推測して祖父母の代までさかのぼれるに過ぎないであろう。定着の深度の浅さという特徴は、中国朝鮮族の家族・親族のネットワークの形成を考察する上で、まず第一にあげられなければならない条件である。

第二に、L村に關係を持つ親族の構造は、比較的単純な形態を特徴としている。韓国のモノグラフで強調される直系的な構造は薄れているが、その反面、現に生きている人間を中心にした兄弟姉妹間的な構造が強く表現されているのではないかと氏は考える。

第三に、直系的な構造が希薄という特徴は、親の扶養、同居が長男に偏っていないという事実にも表れている。次男・三男との同居も多く見られ、年長者から外に出ていくある種の「末子相続」的な姿をうかがうことができた。

第四に、L村朝鮮族における非直系的

な姿は、男系親ばかりに限定されないで、母方、妻方の親族にも広がる共系的(cognatic Cohen, Myron: 1976)の概念による)な構造を推測させる。中国朝鮮族の場合、母方や妻方の墓を父方の墳墓と同じ墓地で祭祀することはない。しかし、祖先の祭祀は父母か祖父母の範囲に限られるので、祭祀に男系の系譜的な観念は生じにくく、共系的な傾向が強くなるのを推測することができる。

以上のような実証研究から、評者が特に刺激を受けたのは、下記の二点である。まず、中国朝鮮族家族の実態などを通して、「東アジアに共通すると考えられている儒教的父系秩序が、近世的な国家・社会秩序の形成の過程で規範化されたのであれば、現代の社会変容の中で再び大きな変化が兆しているのを指摘することに無理はないであろう」という氏の問題提起である。

次に、「中国の朝鮮族は、半島から流民として移住したという歴史的经验から、両階層に強調された父系の規範的モデルから遠いところに生きざるをえなかつ

た。現実には柔軟に適應して生きていく「状況論理」とも言うべきものがあるのである。儒教的規範が根付く以前の原初的な論理が出現する可能性も高かったのではないかと推測することもできよう」という点である。

氏が提示されたような、中国の少数民族と位置づけられている周辺社会の構造・文化の構成を検討する際、これら原初的国や国なき社会などが持つ原初的な部分を明らかにした上で、原初的な部分を近世的な国家・社会秩序の枠組に組み込んでゆく過程、どのように状況論理によって現実に適應していくのかについて、私たちは今後、多様な視点から考察していくべきであると考える。

#### (五) 第五章「中国における朝鮮族の文化と教育の発展概況」について

この章は朝鮮族の出身者廉光虎氏が執筆した部分である。氏は、「中国朝鮮族が独自の文化を継承する活動は、曲折と困難を経ながらも、拡大発展してきた」という主旨に基づき、延辺朝鮮族における文化と教育の歩みを目次通りに紹介し、

朝鮮研究者に系統的な資料を提供した。この章は、資料の構成だけに留まらず、伝統文化と教育を強く維持し発展させるなかで、延辺朝鮮族が自民族のアイデンティティを持つにいたった過程を示した。

以上のように、本研究に参与した各執筆者は、各自の分野や視点によって本研究の研究起点を踏まえて、移住による中国延辺朝鮮族社会の形成史・家族構成の実態およびネットワーク・エスニシティについて明らかにしている。さらに、最後の「結語——これからの研究課題」の部分では、本研究で明らかになったことをふまえて、中国朝鮮族の社会人類学的研究としてさらに展開すべき問題を提出した。

#### 四 最後に

本書の成果は、研究に参加した日中の研究者が問題意識を共有したところになりつつある。こうした合作方法に対して特に評価したい。それは、調査対象の背景を十分に理解し、言語上・心理上の

障害もなく、調査対象と同一民族の出身者という利点と、感情を越えてより冷静的・客観的な考察ができる点を上手く結び付けたからである。このような合作によって、少なくとも第一に、調査データの確実性が確保できるし、それに基づいての分析も客観的になるし、第二に、中国東北部の少数民族社会に対する社会学的、人類学的な調査研究が不十分である空白を埋め、ファースト・ハンドな研究が促進できるであろう。

また、調査対象の選定と関連する本研究の調査データについても評価したい。延辺朝鮮族自治州全体の民族構成の比率は、朝鮮族が三九・三三%、漢民族が五七・八一%である。つまり、民族自治地域でありながらも、少数に留まっているのが現実で、州全体の統計だけでは、朝鮮族の実態を理解するのは難しい。それに対して、州内の「龍井市」や「延吉市」「図門市」などに住む朝鮮族は依然六〇%前後の人口を占めている。本書に所収された事例は、いずれも「龍井市」「延吉市」「図門市」などで行なわれた調査結果

である。本書に示されている調査データは、中国朝鮮族の現状を知る上できわめて価値のあるものだと言わべきである。

第一部は、各執筆者が各自の視点によってまとめた成果であるが、章と章の間に論理的な繋がりがあっても、それが明瞭にされていないこと、および移住史に関する内容に重複したところがあるのが気になる。これは、編者の佐々木衛、方鎮珠両氏が各執筆者の独自性を尊重し合った結果ではあるうか。

最後に、中国側も『中国少数民族現状と発展調査研究叢書——龍井市朝鮮族巻』（民族出版社、一九九九年）を出版した。朝鮮族社会に総合的に考察するのに対して参考になると思う。また、朝鮮族の新たな集地となっている瀋陽市の韓国人・朝鮮族社会に対する調査ができれば、中国朝鮮族と半島朝鮮族の結び付きなどについて、より面白い発見ができると思う。